Seraphim Doll's Fetishism

伊吹 理緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｅｒａｐｈｉｍ　Ｄｏｌｌ'ｓ　Ｆｅｔｉｓｈｉｓｍ

【Ｎコード】
Ｎ２２５６Ｚ

【作者名】
伊吹　理緒

【あらすじ】
私立アザレア女学園。
そこは、清らかな風歌う内部進学式の宣教学校。
今年で十六歳の徽生真白（きしょうましろ）は、両親の強い希望でその学園に外部編入する事になってしまう。

『完全清潔淑女（パーフェクト・クレンリー）』
『変態悶絶兎（セクシュアル・バーバージョン・ラビット）』
『暴力革命（バイオレント・レボリューション）』

右も左もわからぬ真白を待ち受けていたのは異様なあだ名で呼ばれる癖者だらけの天使達だった。
異様が異常を呼び、異質で異端な日々が真白を誘っていく。

――貴女が貴女のままでいられぬように、わたしがすべて壊してあげる――

思春期真っ只中の少女達のフェティシズム（禁断性愛）が発露する波瀾の学園ガールズラブストーリー、開幕。

※この作品は以前登校した同名作品を大幅に修正、加筆したものです。以前のものと設定等が所々違いますが、こちらが本筋となりますので、以前のものをお気に入り登録してくださった方々には大変申し訳ありませんが、以前のものは削除させて頂きます。

Heartbeat Doll

「貴女は熾天使（セラフィム）を宿した人形なのね」

幾億の星屑を躍らせる夜天を、少女は深遠な瞳で覗いている。
続く言葉は無く、追う音も無い。ただ天を仰ぎ、ただ星屑を覗く。
鋭く伸びた月光は少女の髪に飲まれ地に落ちることができない。
真黒だった。
凛然たる背を這い、上腿まで到るその黒き細髪は、時折吹く無音の微風ですら大きく靡いていた。
ふわりと靡き、ゆらりと落ちる。
落ちるのは影。少女の影。月光の代わりに地に落ちる。影は落ちて広がり、闇になった。否、少女の髪自体が、地の闇なのかも知れない。

「……人形？」

闇に溶けようとしていた小さな光。それも少女だった。
闇が黒なら、光は白だった。黒髪の少女を見つめるのは白髪の少女だった。
黒髪靡く少女の背を、白髪靡く少女の瞳が見つめる。少女が、少女を――見つめている。

「……やっぱり、わたしは人形――なの？」

闇は答えない。
光は消えそうだった。

「……人間じゃ、ない？」

黒は応えない。

白は滲みそうだった。

「人形（わたし）は、人間（あなた）の傍に、いられない？」

人間は喋らない。

人形は喋れなかった。

無音。

影が揺れた。

黒髪の少女がゆっくりと、振り返る。

「……私は」

微笑んでいた。

「貴女を愛している」

――どくん。

その日。

人形に、鼓動が生まれた。

?—Spring Breeze

徽生真白（きしょう ましろ）は通学門を二歩進み、そこではたと気づいて踵を返した。
一度内に潜った門を同じ歩数で外へと潜り、足を止め、真白は今し方歩いてきた路を見つめる。
路の向こうから幾人の少女が歩いてくる。
どれも知らぬ顔。
——おはようございます。
少女達は微笑みながら、門前の真白に朝の挨拶をして過ぎて行く。
——おはようございます。
真白は無表情に返す。少女達に挨拶されるたび、返す。
五回ほど繰り返した。
やはりどれも知らぬ顔。
知らぬのに微笑んでいる。
少女の波は門を抜け、学舎へ流れる。清らかな声と無垢な笑みが波に逆らう真白を飲もうとする。
——ああ、今日も、
また一人。また二人と波が来る。おはようございますと、ごきげんようと潮が鳴る。
——完璧だ。
真白は波に飲まれぬように前だけを見た。舗装された眼前の通学路。緩やかな勾配の下り坂。坂はだらだら延々に伸び、遥か彼方に県道が見える。
坂を上る少女達。波はまだ暫く続きそうだった。
真白は目を細め県道と坂が交差している遠景を見る。県道から坂へ吹き上がる風があった。
——いや、暴風かな。

今日も今日とて、と真白は失笑する。

「まぁしろぉ！」

風が鳴いた。冷え張り詰めた空気が震え、路肩の草から朝露が落ちる。

少女だった。

少女の波をかき分け上る少女だった。

少女は坂を疾走する。両の足を力いっぱい躍動させどいてどいて、と少女の隙間を縫って行く。

少女が過ぎれば風が吹いた。

風は淑やかに歩んでいた少女達の着衣を乱す。

「きゃっ――」

黒いプリーツスカートがふわりと巻き上がり、白いセーラージャケットがひゅっと膨らむ。

「わはははは、ワタシは風より速いのだ！」

「ちょ、ちょっと詩尋（しじん）さん危ないじゃない！」

危ないのは坂道での疾走の事か、はたまた崩された防壁の内の事か。少女の一人が白肌を赤く染めて制する。

だが止まらない。

「ゴールっ！　坂道走記録更新！　――つっても今まで記録した事ないけどね」

少女は坂を上り切り高らかに笑った。

「……おはよう、ほのちゃん」

門前に立つ真白は早朝から爽快な笑い声をあげる親友に声を掛ける。ほのはよっす、と短く溌溂に返した。

「お待たせお待たせ。ワタシ今日は遅刻しなかったよ。あれだね、春だからだね」

ほのは逆立った栗色の短髪をごしごしと強引に撫でつけて、春は良い、などと呟き伸びをした。

「……春でも一昨日は遅刻した。ほのちゃんの遅刻常習は季節とか気温とかの影響じゃなくてただの怠慢だよ。精進しなさい」

「わはは、根に持ってる持ってる。一昨日はごめんって、だけどさ律儀にワタシが来るまで待っててくれるのは有り難いんだけど、それは遅刻しない時間までにしてよ。遅刻したワタシを待って真白まで遅刻するとか、二重の責め苦だよ」

「……」

ほのが遅刻した日は真白も同じく遅刻する。遅刻すると言っても真白は毎日始業時刻の三十分前にはここに到着しているわけだからそれは遅刻ではない。だが二人はいつもここで待ち合わせして一緒に学舎へ向かう事にしているので、ほのが来なければ真白は門を潜り進む事が出来ないのだ。いくら早く学校の前に居たとしても、始業時刻に教室に居なければ問答無用に遅刻である。

一昨日も遅刻した。

真白はほのが来るまで絶対にここを動かない。

だから、ほのが遅刻した日は必ず真白も遅刻する。

「本当に、ナミダが出るほど嬉しいけどさ、そこまでして守るほどの約束じゃないよ。真白の家とワタシの家は離れてるから一緒に登校できないけど、ならせめてここから先は一緒に行こうって決めたけどさ、それは契約じゃなくて約束なわけだ。契約は破れば何かしらの罰が与えられるのが常だけど、約束ってのは友達が友達を思って結ぶ決め事なんだから、友達の為になる破り方なら破って良いんだよ。ワタシが遅刻するのは自業自得なわけで、先生に怒られるのは仕方ない。だけど遅刻してない真白が怒られるのは嫌だよ。その時点でこの約束は友達の為になってない。だから、そういう場合は何の気になしに破ってくれよ」

これも、約束だ。とほのは微笑んだ。

「……わかった。じゃあこれからはほのちゃんかわたしの為にならない二人の約束なら容赦なく破るね。手始めに、宿題を写させてあげるって約束もほのちゃんの為にならないので今日限り止めます」

「――ケースバイケース！」

「うふふ、だめ」

坂を上る最後の波が二人の横を過ぎ通学門を潜った。

「さて、ワタシ達も行きますか」

時刻は八時十五分。始業時刻まであと十分だった。

真白は小さく頷いて歩き出す。

「あ、そういえばわたし今日考え事してて、気づいたら門を潜ってたの」

直ぐに気づいて踵を返したんだけど、と真白は続ける。

「お？　そうなの？　何々、真白が夢中になるほどの考え事って何なのさ」

「……ううん、わかんない」

「何じゃそりゃ」

寝ぼけてたんじゃないの、とほのは笑った。

「いや、寝ぼけては無いけど……だめ、思い出せない」

やっぱり寝ぼけてるのかも知れないと、真白は頭を振るった。

「ま、思い出したら教えてよ」

「……うん」

風が吹く。

柔らかで、清らかな春の風。

「さて、今日も今日とて、信仰厚く行きますか！」

「うふふ、そんな軽口だと怒られちゃうよ？」

大丈夫大丈夫、愛があればすべて許されるから。と言ってほのは

軽快な歩調で門を潜った。
春風を背に感じながら、真白も続く。
間もなく終る四月の風だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2256z/

Seraphim Doll's Fetishism

2011年12月8日01時06分発行